

イラストレイテッド泌尿器科手術 第2集 図脳で学ぶ手術の秘訣

加藤晴朗 著

＜書評者＞ 岡根谷利一（虎の門病院・泌尿器科部長）

多数の秀逸なイラストを用いて手術手順を簡条書きにしたユニークな手術書である。注視する必要のない箇所は書いていなくて、“図脳”が“頭視(?)”した関心領域のみを描いている。確かにユニークな手術書だと思うし、さまざまな内容を網羅していてなかなか真似のできるものではない。

加藤晴朗先生とは学生時代から信州大学の医局まで30年以上の付き合いであるが、彼でなければなかなかこのような本は書けないと思う。短距離走がめつぼう速いのと、絵がうまいのには以前から脱帽していた。旅行はインドや中国、バングラデシュ、留学はエジプト、欧米は行きたくないという“変わった(?)”アナログ人間であり、本書のイラストはまさに彼が描き溜めた長年の手術記録にほかならない。

この本を眺めていると、第1集もそうであるがイラストの筆遣いがわれわれの恩師である小川秋實先生のものによく似ている。簡潔かつ明快な絵柄とカラーで理解が深まり、読者を飽きさせない工夫がなされているように思う。

上手な手術ほど誰でも簡単にで

きそうに思わせるが、まさにこの手術書を読んでいると簡単に手術が終わりそうな気がしてくる。

加藤先生の場合、やはり“描かずにはいられない”病気にかかっているようであり、手術室ではデジタルカメラを持ち歩きながら膜構造などの解剖を確認している姿をよく見かけた。この手術書には術野の写真はまったくないのであるが、手術写真集が出せるくらい写真も所有しているはずである。もしかして次は写真集でヒットを狙うかも？

第2集では非定型的な手術が増え、イラストも一段と冴えたものが増えたように思う。それ以上にコラムが増えたが、これも“書かずにはいられない”彼の読書歴からくるものであり、アナログ手法によるイラストと表裏一体のものであろう。

手術のイラストを上手に描ける人は手術中の術野の見方がほかの人とはまったく異なるのだと思う。“絵を描くぞ”と思えば、まさに“図脳”にインプリントしておかねば手術が終わったときに頭の中は白紙解答となってしまう、さらにビールでリセットされて

1日は終わりである。せめて翌日に、この手術書のイラストを写実して反省しながら勉強し直すのもよいであろう。

先日、加藤先生に超写実主義の美術展を観に行くことを勧めた。本当は絵なのであるが、女性の髪の毛1本1本まで自然に流れていて、どう見ても写真であるという信じがたい芸術である。DaVinciのコンソールを覗くと極めて精細かつ深みのある3Dの術野が見られ感動する。よく考えればテレビがアナログからデジタルに変わったときも画像を見て驚いたし、ラパロの手術をハイビジョンで見ていると、それまでの画像は何だったのかと思ったことを思い出す。しかし間違っではないけなのは、DaVinciにしても手術の完成度というのはあくまでも解剖をよく理解したうえで無駄のない手技と手順によって規定されるものであるということであり、これは未来永劫変わることはないであろう。

今後もこの手術書は、長く座右の書として役立つものと信じている。

●A4 頁352 2011年
定価15,750円
(本体15,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-01103-7]
医学書院刊